

イエジー・カヴァレロヴィチ監督の世界



Jerzy Kawalerowicz
1922-2007



ポーランド映画ビデオ鑑賞会第二弾として、カヴァレロヴィチ監督の名作「夜行列車」(1959、ヴェネツィア国際映画祭ジョルジュ・メリエス賞受賞)と「尼僧ヨアンナ」(1961、カンヌ国際映画祭審査員特別賞受賞)をとりあげます。

お誘い合わせでご参加をお待ちします。

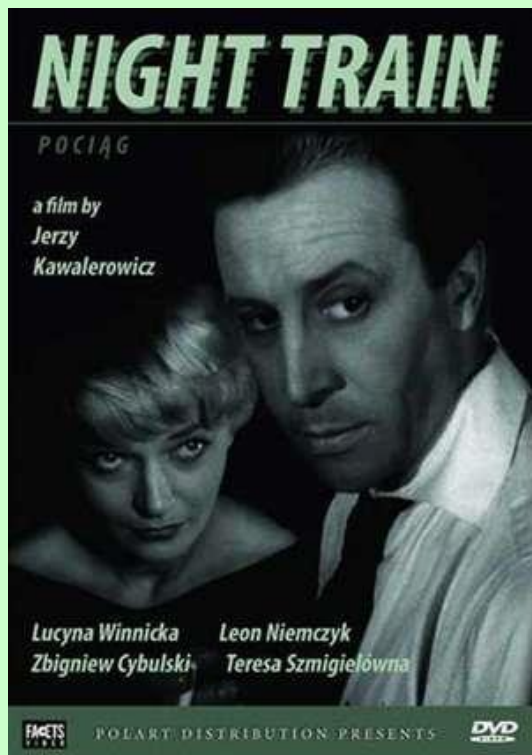
日時：2017年7月17日(月・祝) 13:00~

会場：札幌エルプラザ 4F 大研修室(北8西3、JR札幌駅
北口より地下歩道12番出口 徒歩3分)

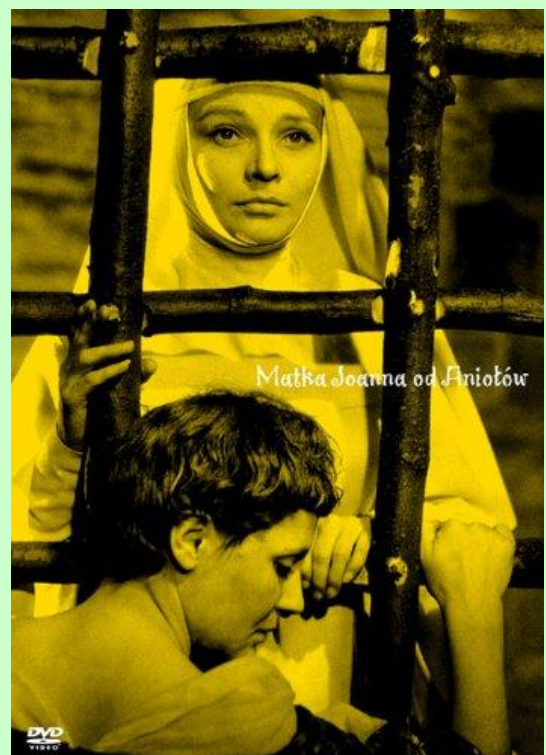
- | | |
|-------------|---------------|
| 13:00~14:40 | 夜行列車 (100分) |
| 14:50~16:40 | 尼僧ヨアンナ (108分) |
| 16:40~17:00 | 作品について意見交換 |

予約不要、直接会場へお越しください

お問合せは、電話 090-2695-3880、メール cocobluemoon@gmail.com へ(小林)



夜行列車(1959)



尼僧ヨアンナ(1961)

監督 イェジー・カヴァレロヴィチ 1922–2007

1922年1月19日、現ウクライナのイヴァーノ＝フランクィウシク州グヴォジチエツ（1920–39年にはポーランド領）生まれ、父親はアルメニア系ポーランド人。1944年に一家でクラクフに移住、クラクフ芸術アカデミーと並行して同地の「青年映画学校」で学ぶ。

アンジェイ・ワイダ監督をはじめとする“ポーランド派”の台頭期には、奇抜な構成の政治スリラー『影』(56)、第二次大戦が一组の夫婦にもたらした悲劇を描いた心理ドラマ『戦争の真の終り』(57)を発表。次いで、様式的に洗練された二本の名画——同じ列車の客室に乗り合わせた二人の男女を中心とした群像劇にスリラー的要素を絡めた『夜行列車』(59)と、悪魔憑きを主題としたイヴァシユキエヴィチ原作の『尼僧ヨアンナ』(61)——を監督、この二本は数多くの賞（前者はヴェネツィア国際映画祭ジョルジュ・メリエス賞、後者はカンヌ国際映画祭審査員特別賞、ほか）を受賞した。

ワイダらに代表される当時のポーランド映画の多くがポーランドの歴史的運命と現代史の係わりなど、政治的・社会的色彩の濃い作風を好んだのに対し、カヴァレロヴィチはむしろ実存的、心理主義的描写を好み、ある種異彩を放つ存在であった。（ポーランド広報文化センターより）

夜行列車 1959

スターリン死後の“雪解け”で改革成ったポーランド映画界は創作集団別の6ユニット制となり、その代表格がカヴァレロヴィチ率いる“カードル”で、アンジェイ・ワイダもそこに属した。本作はそうしたポーランド映画の充実期に作られた、みずみずしさと力強さを合わせ持つ秀作である。

主人公マルタは年下の男との恋を逃れて、ワルシャワからバルト海沿岸に向かう夏の週末の夜行列車に乗り込む。乗客は聖職者、医者、弁護士、新婚カップル、不眠症に悩む男などさまざま、彼女を追う恋人もその中にいた。そこへ一人の殺人犯が紛れ込んだため起こる波紋をサスペンス風に描きながら、それぞれの人生を鋭くあぶりだす。

アメリカのジャズの大御所アーティ・ショウ（1910–2004）の“ムーン・レイ”を、ポーランド・モダンジャズの第一人者アンジェイ・トシャスコフスキー（1933–98）が編曲したスキヤットのテーマが気怠いムードを煽り立てる。ラスト、終着駅の列車の窓に広がる北国の夏の海辺の光景が寂寥として美しい。

尼僧ヨアンナ 1961

20世紀ポーランドを代表する作家イヴァシユキエヴィチ（1894–1980）の、17世紀フランスの史実に基づいた短編小説の映画化で、舞台はポーランド北方に置き換えられている。

辺境の尼僧院に赴任する司祭スリンが僧院近くの宿屋で僧院の噂話を聞く。院長ヨアンナをはじめ、尼僧たちはみな悪魔にとりつかれ、情欲のままにふるまっている。スリンの前任者はヨアンナの魔性に狂って火刑に処されたのだ。彼は悪魔と対峙する前からすでに震えおののく。そして会ったヨアンナは、平常時は美しく淑やかだが、ひとたびその魂が悪魔を呼べば、獣のように肉の交わりを求めて這いずり回るのだ。自分にも、ヨアンナにも、鞭打ってその誘惑を振り払わせる苦行を強いるスリンだが、次第に彼女らの内奥にある魂の真実の叫びが彼にも届き始める…やがて彼に下される火あぶりの断罪に、悪魔も彼と共に昇天するであろう…鬼才カヴァレロヴィチによる真の恐怖映画。（以上、allcinemaより）